

## 2021年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、千里国際中等部・高等部校長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成28年改訂）で示された学校運営における12分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」、「生徒指導」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「教育環境整備」、「人権教育」を設定して実施しました。また、今年度事業最終年度となる、文部科学省から採択を受けたワールドワイドラーニングコンソーシアム支援事業に関連して「国際理解教育」を継続しました。また、アンケート調査に関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として加え、そして今年度も「学校のコロナ禍についての対応」についての質問を設定しました。

2021年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒99.6%（前年度回収率98.9%）、保護者68.9%（前年度回収率73.0%）、教員100%（前年度回収率100%）でした。

今年度も、各項目の生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2022年3月18日  
関西学院高等部  
部長 枝川 豊

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」としている。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通してイエス・キリストから生き方を学び、又その学びの目的を他者に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱として、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

2019 年度、文部科学省より拠点校として採択されたワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWLC）を軸に、性別、年齢、国籍など様々な違いを超えてお互いの個性、人格、多様性を認め合い、「凡ての人に仕える」、「地の塩、世の光」として、「平和な社会を築く担い手」となる世界市民を育成をする。

### 2021 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、生徒の「学び」が確かなものになっているか、そのためのカリキュラム編成になっているか、検証のために評価項目として設定している。
- 生徒指導：規律ある生徒の生活環境、および安心して学べる生活環境が整えられているかを検証するために評価項目として設定している。
- 教育環境整備：共学化になり引き続き生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することは重要であり、快適な学習環境を保证するために評価項目として設定している。
- 人権教育：重要項目であり、グローバル社会において人権を尊重し、多様性が受容される環境が整っているかの検証のために評価項目として設定している。
- 国際理解教育：WWLCを通して生徒の国際理解を深めるため、評価項目として設定している。

### 2021 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 生徒のキリスト教に関する理解の向上を目的とした活動を今年度も引き続き行った。その結果、生徒（問4）「高等部の教育にとって、キリスト教はその土台であると思う」で肯定的な回答を 80.9%（昨年度 75.6%）、生徒（問5）「礼拝の時間は大切だと思う」で 73.2%（昨年度 68.2%）、生徒（問6）「聖書の言葉は共感できる部分がある」で 76.8%（昨年度 73.7%）を得た。昨年度と比較してみるとすべての項目で評価が高い。これはコロナ禍にあつて、方法は変わっても礼拝をしっかりと守り続けられることができたからだと考える。</li> <li>● 自由出席である早朝祈祷会（水曜日 8:10）の出席状況の向上を毎年目標としているが、平均出席 116.0 名（昨年度 73.0 名）と増加した。2019 年度（コロナ禍前）が平均出席 125.7 名なので、コロナ禍であっても元の水準に戻ることができた。</li> <li>● 学校外のキリスト教関連団体（教会・ボランティア）との連携・関心を高めるため、「熱海市土砂災害により甚大な被害を受けた地域のための献金」、学童保</li> </ul>		

	<p>育、キリスト教会が主催する地域活動での奉仕、コンタクトレンズケースのリサイクルなどの活動を行った。特に神戸大学附属病院に長期入院する子どもたちとZ o o mで交流会がもてたことはよかった。その結果、生徒(問7)「高等部は、キリスト教関連団体(教会・ボランティア)に関心を持っている」で肯定的な回答が72.8%(昨年69.1%)とこれも昨年度と比較して評価が高い。ボランティア委員会には、現在25名の委員がいる。</p> <p>● 保護者が回答した問4「高等部が実施しているキリスト教主義教育は、子どもの人間的成長に寄与している」の肯定的な回答の割合は84.7%(昨年82.6%)と多くの保護者が昨年同様強い関心を示した。保護者の方へのキリスト教理解の取組の一環として、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」を行っている。その出席者数もコロナ禍でも現状維持をしている。</p>
今後の方策	<p>● すべての項目で増加という評価を受けて、「逆境にこそキリスト教教育が求められている」ということを再認識した。創立以来、大切にしてきたことを守っていく強さが問われていると考える。</p> <p>● コロナ禍で、近隣教会の牧師をお呼びしにくい状況にはあるが、関西学院内のクリスチャン教職員に今以上に奨励を依頼し、魂の育成に励む。</p>

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【関西学院大学への院内推薦制度に基づく学校として、その制度を活かし、基礎的な学びの上に、主体性や探究型といった時代に適応した学びを実現するカリキュラムや制度を構築する】	自己評価	A
目標	<p>● 接続する大学で主体的に学ぶ力を保証し、多様化・不安定化する社会に対応できる学びの力や姿勢を習得する。具体的には「1. 基礎学力の向上」、「2. 課題を発見し、解決策を考える探究型の学びを深める興味や関心に応じ深く学ぶ」、「3. 興味や関心に応じて深く学ぶ」を目標として掲げる。</p> <p>● その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。</p> <p>● 教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。</p>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <p>● 基礎学力向上の取り組みとして、これまで数学と英語で実施してきた1年生特別授業、3年生選択授業に加え、2年生の必修選択でもベーシック講座を新設。数学、英語で1年次の未修得科目がある生徒を対象として15名ずつを指定し、未修得単位の回復と基礎学力向上を目的に授業を実施。</p> <p>● 主体的な学び・探究型の学びについては、WWLCの最終年度に際して3年間のカリキュラムがひと通り完成した。WWLCで新設した3科目(AI活用、ハンズオンラーニング、グローバルスタディ)を中心に、生徒の主体的な学びの過程(知識獲得・課題発見・考察・議論・実践・発表など)や教員による評価の仕組みについての蓄積を重ねた。</p> <p>● 教育課程や進路の説明については、特に2年生の文理選択に向けて1年次から効果的な情報提供の機会を設定した(1学期末に理系学部を中心とした神戸三田キャンパスの見学会、2学期末に関西学院大学の学部紹介と理系の魅力を伝える講演会を実施)。</p> <p>(取組の効果に対する評価)</p> <p>● 進路、推薦、進級に関する説明については、保護者、教員ともに肯定的な認識</p>		

	<p>(強くそう思う・どちらかといえばそう思う)が強くなっているものの、より強い肯定的な認識(強くそう思う)は減少している。特に大学推薦については、2年生向けのオープンキャンパスが中止になったり、3年生向けの大学各学部の説明会がオンライン形式となったりと、質・量ともに不足していた印象は否めない。それは、関西学院大学との連携について、教員(問20)「高等部は、接続する関西学院大学・各学部と適切に連携を図っている」において、否定的な認識が強まっている(31.4%→45.3%)ところからもうかがえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ただ、学校内で教育課程の編成や実施について連携が図れているかという教員(問11)に対しては、否定的な認識が大きく増加(9.3%→27.5%)している。今年度から教務システムを入れ替え、日常的な業務で大幅な変更が生じたことも影響していると思われるが、コロナ禍で不確実な要素が多かったにせよ、教育プログラムの実施に事前の周知や調整が不足していた面もある。</li> <li>●「学力」のうち、「生徒に適正な学力を定着させているかどうか」という教員(問14)については、教員では強い肯定的な認識(11.1%→17.6%)も、否定的な認識(13.0%→17.7%)もともに強まっており、認識が両極化しているように見受けられる。同じような現象は、授業研究と授業改善について、また生徒の社会的課題に対する関心や姿勢についての設問でも見られ、アクティブラーニングから始まり、ICTの導入や探究型の要請に至る、教育の方法や本質の変化が教員に挑戦や戸惑いを与えているものと思われる。特にWWLCに代表される探究型の学びについては、現在進行形の分野であり、答えがないだけに教員も手探りの状態で、真剣に取り組めば取り組むほど、迷ったり不安になったりする傾向があると思われる。ただし、一貫して教員間では外部テストの活用については否定的な認識が強く、根底にある教育観は共通しているものの、その各論においては差違があることがうかがえる。実際には、保護者においては、生徒の社会的課題に対する関心や姿勢についての設問で肯定的な方向へ変化していることがうかがえるように、一定の成果は挙げられていると考えられる。</li> <li>●「学び」のうち、補習や選択授業については、教員(問17)「高等部は、補習や選択授業を通じ、生徒の個性・の能力に応じた学びを展開している」において、教員間で否定的な認識が大幅に強まっている(11.1%→27.5%)。選択授業は多彩な科目構成が特色であるものの、生徒の学習活動や評価には大きな幅がある。長い歴史を持つ選択授業であるが、その意義や方向性については、再定義が必要と思われる。</li> <li>●なお、生徒の評価や学力の定着、選択授業などの設問で、保護者では概ね肯定的な認識が強まっているとはいえる。ただし、それでも強い否定的な認識は2割を超える水準であり、看過できる状態ではない。各プログラムや制度の精査を、教員間だけでなく、生徒・保護者にも分かりやすく伝えていく必要がある。</li> </ul>
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●基礎学力の向上に向けては、3年間通しでの枠組みができあがったので、生徒にその主旨をしっかりと理解してもらい、課題については改善しつつ継続する。その上で、次の段階として探究型の学びや興味関心に応じた学びの深化に向け、既存の学習活動での工夫を実践していく。具体的には、2年生必修選択では通常教科でも探究型の試みを推進し、3年生選択授業では新たな科目の実施を進める。</li> <li>●主体的、探究的な学びについては、文科省指定の事業は終了するものの、学院からの支援を受けてこの方向性は継承する。重点的に探究型3科目について、より多くの教員が関与する体制、学習内容の蓄積、評価の実践の蓄積を進める。それと共に、来年度から新学習指導要領が年次導入されることとあわせ、一般</li> </ul>

	<p>の授業(特に国語科や地歴公民科)でも探究の要素を取り入れていく。</p> <p>●進路指導に関しては、情報提供の見直しはもちろんのこと、3年間通しで単なる学部選択に終わることのない進路指導を目指す。具体的には、外部企業のサービスを活用し、新しい学力観に沿った自己分析、学問領域やキャリアの意識、的確な自己表現ができるスキルも組み込み、大学推薦制度に基づく高等部ならではの内面を重視した進路指導を構築する。</p>
--	---

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主性を育み、気持ちよく学校生活を送るための生活指導徹底】	自己評価	A
目標	学校生活のルールを守り、他者に気遣い、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <p>新型コロナウイルス感染防止対策には特に対応強化せざるを得ない状況であった。特に、食事関連に際しては再三の喚起を行うなど年間を通しての対応であり、行事を通常通り実施できない中にも可能性を探り続けてきた。また、近隣からの苦情対応に、誠意をもって答えられるように生活指導を年間を通し心掛けた。しかし、前年度同様に全校生徒はもとより、各学年単位においても集まれる機会を奪われることが多く、全体への注意喚起の仕方について悩まされることが多かった。対面に近い形で注意喚起の仕方を心掛けてきた中での対応は以下の通りである。</p> <p>&lt;C l a s s i等におけるアナウンス重点事項&gt;</p> <p>●登下校中のマナー改善呼びかけ：度重なるアナウンスを実施する中で、徒歩での通学路の広がり等ドライバーからの苦情が続いた。各クラスにおいても担任から注意喚起頂くなど指導を継続した。</p> <p>●感染拡大防止について：昼食の摂り方、食堂利用に際しての注意によって「黙食」の習慣は定着しつつあると思われる。クラブ活動において下校時刻を守ることは各クラブともに例年以上に時間を厳守する習慣を身につけることができた。</p> <p>主に上記2点があげられる。</p> <p>&lt;通常取り組み&gt;</p> <p>●制服着用の意味：今年度より平日以外は「私服可」としたことから、前年以上に制服の着方について指導を行った。特に革靴以外の靴を履いての登下校する姿は激減した。</p> <p>●感染対策に伴う具体的な指導：手洗い、消毒、換気、また部室等での飲食を禁止した。指導部と各顧問との連絡を図り生徒に混乱が生じないように心掛けた。県からの通達に伴う指導を行った。</p> <p>●自転車通学者向けガイダンス：マナー向上は見られるが、集団となつての登下校は今後の課題でもある。</p> <p>(取組の効果に対する評価)</p> <p>●教員におけるアンケート集計結果 前年度とほぼ同様の数値ではあるが2項目(問24、27)については前年より評価が厳しいものであった。つまり、生徒部よりの情報提供が不十分であったことを意味し、改善すべきところである。生徒達のみならず教員間での意思疎通</p>		

	<p>の重要性を問うていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●生徒におけるアンケート集計結果 基本的な生活習慣における指導については、生徒達からの評価が微増ではあるが評価向上である。しかしながら、日常生活におけるタイムリーな対応については課題が残る。特に問 20「守るべき高等部生活のルールやマナーが明確である」については約 10%減が見られることから情報共有の仕方を工夫すべきである。</li> <li>●保護者におけるアンケート集計結果 前年度とほぼ同様ではあるが、問 13「高等部は生徒が規則正しい生活が送れるよう適切に指導している」について肯定的な評価が増えている。C l a s s i における情報共有が数字に反映されていると思われるが継続していきたい。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>●前年度に続いて新型コロナウイルス感染防止に対する注意喚起を徹底するも、ウィズコロナとして、皆が安心して学校生活を過ごせる環境の提供に尽力していく。</li> <li>●登下校通路における工夫が必要であることから、学院ともタイアップしてマナー向上に努めていく。</li> <li>●気持ちよい挨拶はもとより、礼拝、アッセンブリー時における歌唱力をあげるべく、コロナ前の環境に少しでも近づけるよう尽力していく。</li> <li>●SNSの利用に際し、大人からの使用注意喚起とともに生徒発信の取組にも重点をおく。</li> <li>●誰もが安心して楽しく過ごせる生活環境を整える。特に各行事においては、指針を明確にして、オン、オフの切り替えを上手くできるよう導く。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【生徒・教員の学びを促進する学校設備の整備・改善】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●新しい学びに対応した施設・設備の充実を図る</li> <li>●ICT・アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境をハード・ソフトの両面において整備する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●引き続き、生徒・保護者・教員の意見を聞きながら校舎の整備と維持・管理を行った。今年度は、生徒総会の議題となる程、更改が待たれていた、高等部棟の空調設備やトイレの整備等を行った。</li> <li>●ICT環境については、常駐のICT支援員のサポートにより、機器・ネットワークの運用や、1人1台タブレット環境下での生徒・保護者へのサポートについても順調に推移している。機器の整備については、今年度は情報教室のPCリプレースを行った。</li> <li>●文部科学省の指定を受けている、WWLC拠点校としての活動も最終年度となった。コロナ禍の影響を受けていることは否めないが、新カリキュラムのもと、ICTを用いたアクティブラーニング型・PBL (Project Based Learning) 型・教科横断型授業を展開している。昨年度に引き続き、1. 2. のような「ハード面」だけでなく、3. のような「ソフト面」での教育環境についても整備を続けてきた。</li> </ul> <p>(取組の効果に対する評価)</p>		

	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 結果として、今年度も高等部の教育環境整備に関連する殆どの質問項目（生徒（問 23, 25, 26）、保護者（問 16～17）、教員（問 29, 31, 32））について、90%に近い高い肯定的評価を示している。高等部の教育環境の整備が概ね順調に進められていると判断して良いと考える。しかしながら、生徒と教員に共通する質問「男女共学化、生徒増に応じた施設・設備（トイレ・更衣室・食堂など）が十分整備されている」において、肯定的な評価が昨年度に比べて共に大幅に下落している（生徒問 24:86.1%→72.2%、教員問 30:85.2%→64.2%）。これは、コロナ禍によりそれぞれの施設・設備が長期の制限下にあることや、「感染対策」という観点において、生徒・教員がそれぞれの施設・設備に求めるレベルが上がっていることにも一因があると考えている。</li> <li>● ICT環境の整備・運用が順調であることは、関連する質問（生徒（問 25～26）・教員（問 33～34））にて共に肯定的評価が90%程度であることから確認できる。しかしながら昨年度と比較すると、教員においてそれぞれ数ポイントずつ肯定評価が下落している（問 33「高等部のICT教育環境は適切な水準である」:96.3%→94.3%、問 34「高等部は生徒1人1台端末（iPad）環境を有効に利用している」:94.4%→90.6%）。これは、教員のICT活用能力が向上した（問 35:87%→88.7%）ことに伴う、更なる環境改善の要望が高まったためと考えられる。</li> <li>● 教育環境の「ソフト面」の整備については、主体的対話的で深い学びを志向するWWLC関連の新カリキュラムに関わる教員を20名程度まで増やし、研究開発を進め、最終的に全国から200名を超える教員をオンラインで迎え「探究学習×ICTカンファレンス2021」と題した研究会を高等部にて開催し、実践報告をベースとした教員研修の場を提供した。全国の教員に高等部の教育環境の「ソフト面」について報告し、様々な意見交換ができたことは非常に有意義であった。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 施設・設備の整備についてはこれまでと変わらず、現在の充実した施設・設備の良好な維持、管理を行う。そして、ウィズコロナの時代が続くことを見越し、各施設においてより感染対策を意識した整備を行っていききたい。</li> <li>● ICT環境については、全学年がタブレットを持つ状況でのより安定的かつ効率的な運用を目指す。</li> <li>● WWLCを起点に、引き続きアクティブラーニング型授業・PBL型授業を実践する教員を後押しする体制を整えると共に、来年度はこれまでの情報収集を踏まえ、いわゆる「アクティブラーニング教室」を実現化させ、高等部の学びを最大化できるハード整備を行っていききたい。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	人権教育 【3年間の人権教育シラバス策定と、教科と連携した人権プログラムの策定・実施】 (重点)	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 能力・資質にかかわらず、神に愛されている存在としての自尊感情を培う。</li> <li>● 日常に潜む自他への人権侵害（いじめ、暴力、偏見）に対し、毅然として立ち向かう人権感覚を持つ。</li> <li>● 国籍、人種、民族、出身地、宗教、身体的・精神的特徴、セクシャリティの多様性（ダイバーシティ）を受け入れる柔軟で幅広い人間観を持つ。</li> <li>● 貧困、差別・偏見、抑圧など、社会的不公正による人権侵害に関心を持ち、虐</li> </ul>		

	<p>げられている人々に対する共感的視点を持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 歴史的視野に立って過去を謙虚に見つめ、平和を希求しこれを作り出す歩みに参加する。</li> </ul>
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<p>(具体的な取組の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 昨年は作成できなかった「三年間の人権教育シラバス」を、本年度は作成した。人権シラバスとは、各教科担当に、教科教育における人権関連の実践テーマを「基本的人権・民主主義」、「差別・暴力・いじめ」、「多文化共生」、「貧困・格差」、「戦争・平和」、「ジェンダー・セクシャリティ」、「いのち・こころ・からだ」の7項目に分類して提出して頂き、それを一覧表にまとめたものである。多くの先生方にご協力を頂いた結果、社会科が貧困・格差や民主主義、平和の問題を各学年で取り上げているほか、「外国人労働者やチベット問題」(英語科)、「原子力や核兵器問題」(化学)、「セクシャルマイノリティ」(聖書科)、「こどもの発育」(家庭科)、「手話」(3年選択手話)、「ハンセン病」(3年選択人間福祉)など、各教科教育で様々な人権課題が取り上げられていることがわかった。3年間の人権教育を可視化した点は意味があったが、教科を横断した人権教育の取組を実現するには至らなかった。</li> <li>● 今年も1、2年生は「多様性」をテーマにジェンダーや障がいに関するプログラムを実施し、セクシャルマイノリティの大学生や、脳性麻痺の障がい者の方をお招きし、お話しを伺った。また3年生は「こどもと人権」をテーマに、ひとり親家庭のこどもを対象にした塾を運営しておられる方をお招きし、講演して頂いた。当事者の方をお招きしてお話しを伺ったことは、参加生徒に強い印象を与え、プログラム後のアンケートでも、「良かった」と答えた生徒が高い割合を占めた。しかしながら、今年もコロナ感染の影響で、密を防ぐために学年が一箇所に集まることができず、プログラムを分割・縮小せざるを得なかった。その結果、ホームルーム内のグループでの分かち合いにも制約が生じた。「人権講座を中心に、高等部はさまざまな人権問題について意識を高める教育を行っている」という項目に関し、生徒の肯定的評価が前年度 86.3%から今年度 82.9%、教員の肯定的評価が前年度 96.2%から今年度 88.4%に低下している点は真摯に受け止め、コロナの制約下でも行えるプログラムの形態を、今後も模索していく必要を感じる。一方、保護者アンケートの中で、「生徒自身が種々の人権問題について、より関心を持つようになったと家庭で感じる」という項目が、前年度 58.9%から 62.4%に増えたことは、人権に関わる問題が、家庭でも話題になっているのだろうかと感じている。</li> <li>● 「男女共学化、生徒増に応じた施設・設備(トイレ・更衣室・食堂など)が十分整備されている」という項目について、生徒の肯定的評価が前年度 86.1%から今年度 72.2%と大幅に下がっている。ジェンダーに関する人権プログラムの振り返りアンケートにおいても、施設・設備に関する生徒の様々な声が寄せられており、生徒がどこに不便を感じているか、学校として把握しておく必要を感じる。</li> <li>● 今年は全学年一斉で、9月に「いじめアンケート」を実施した。アンケートで明らかになった事例については学年団・人権教育推進委員会・生徒指導部・カウンセリング委員会が情報を共有しつつ、慎重に対応した。「高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という項目に関する肯定的評価は、生徒が前年度 80.1%に対し今年度 78.5%と微減、教員が 94.3%で昨年とほぼ変わらず、保護者が 82.3%でやや増加した。いじめアンケートの形式や事後対応について、生徒と教師・保護者の間に受け止め方の乖離が生じないよ</li> </ul>

	う、更に検証・改善を進め、いじめ防止に引き続き学校をあげて取り組む必要がある
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>●キリスト教教育・教科教育と連携した人権シラバス作成継続と、教科横断的人権プログラムを策定する。</li> <li>●コロナ下でも実践できる、生徒の主体性を尊重する対話的な人権プログラムを実施する。</li> <li>●希望者を募った実践的アクティビティ（施設訪問・フィールドワーク等）を模索する。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な諸問題を含む国内外の社会的課題の解決への関心・意欲の育成】（重点）	自己評価	B
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●文部科学省から採択を受けた3年目のWWLCに関わる授業や活動、学校全体の様々な教育活動を通して、SDGsに代表されるような国内外の社会的課題の解決に主体的に関わろうとする姿勢や、多様な価値観を学ぼうとする意識を育む。</li> <li>●国内外で開催される国際交流プログラムを紹介し参加を促すことを通して、国際理解に関わる学びを深める機会を提供する。</li> <li>●中期・長期留学、海外語学研修、海外フィールドワークなどといった海外での活動への参加を促し、本校でも留学生を積極的に受け入れることで、学校内での国際交流の場を作り出す。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<p>（具体的な取組の状況）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●本年度は昨年ほどではないものの、引き続き新型コロナウイルス感染拡大のために様々な教育活動が制限された。夏休みの海外語学研修旅行については2年連続中止、その代替案として企画した2泊3日の大阪での国内英語研修 YOLO English Camp も20名が参加予定であったが、緊急事態宣言発出のため残念ながら中止となった。</li> <li>●しかしながら、その国内英語研修旅行の代替案として企画したオンライン国際交流授業を夏休みに実施し、14名がフィリピン、パキスタンの高校生と交流をした。また、保護者にもその対象を広げ、ザンビアとつないだオンライン海外フィールドワークを育友会（PTA）とも企画した。2世帯参加（教員も有志5名参加）と数は少なかったものの、海外の文化について知る機会を持つことが出来た。</li> <li>●留学関連については、昨年度の留学出発者は0名であったが、今年度は2学期間のみの中期留学でカナダに5名、3学期間のみの中期留学でアメリカに1名、1年間の長期留学でカナダに1名、アイスランドに1名が出発した。本来なら3学期からは3名がオーストラリアにも行く予定であったがそれは来年度の4月に出発延期となった。海外からの留学生として、AFSのアジア架け橋プロジェクトでベトナムからの留学生を11月から3月まで本校で受け入れている。このように、少しずつではあるが、生徒にとって海外の文化と直接触れる機会が増えたことは嬉しいことであった。</li> <li>●さらに、生徒たちは様々なオンライン国際交流イベントに参加した。夏休みには、関西学院大学が主催する他校の高校生と日本にきている海外からの留学生との国際交流イベント「オンライン高校生国際交流の集い」に4名が2日間に渡って参加した。また、同じく夏休みには「第7回アジアユースサミット」には7名</li> </ul>		

が参加してビジネスプランを企画、実行し、賞も受賞した。また、FedEx 主催の“FedEx Express International Trade Challenge 2021”に2名が、大阪大学大学院主催の“Future Global Leaders Camp 2021 Online”に1名が、AFS主催の“AFS Global You Adventurer”に1名が参加した。3月に開催される関西学院大学などが主催の「WWL・SGH×探究甲子園」には、WWLCを受講する生徒が3名応募し、探究活動プレゼンテーション部門、グループディスカッション部門の両方で1次審査を通過し、2名が参加できるようになった。色々な学外のイベントに積極的にチャレンジする生徒たちの姿が見られた。

●WWLCにおいては、様々な社会的課題に対して解決策を探ろうとする探究授業が教室の内外で展開された。外部の講師を積極的に招く（Zoom含む）だけでなく、実際に現地に赴いて社会との直接的な接点を作るなど、コロナ禍にあっても積極的に教室の外とのつながりを作りだしていった。以下はほんの一例である。

- 1) 2、3年生対象のグローバルスタディ科目においては、アジアを中心とした高校生たちと環境問題、またその解決方法について定期的にZoomを用いて意見交換をするなど国際的な視点を得ながら学びを深める授業が展開された。12月には自分たちの学びと関わりのある7団体をオンラインで、もしくは実際にフィールドワークでインタビューをするなど、積極的に学びの幅を広げた。
- 2) 2、3年生対象のハンズオンラーニング科目において、平和学習で先進的な取り組みをされている長崎の鎮西学院を1泊2日で2年生が訪れ、長崎の原爆資料館を含み、平和についての学びをフィールドワークで深めることが出来た。また、3年生は自分たちが制作したKG PEACE MAPという関西学院のキャンパス上にある戦跡を回るウォーキングマップを用いて大学生や中学生、同じ高校生にワークショップや授業を開催した。
- 3) 2、3年生対象のAI活用(AI)科目においては、関西学院大学の理工学部教授や学生に指導を受けながら実際にチャットボットを作成、AIを積極的に取り入れている企業からゲストスピーカーを多数招くなど、AIが研究、導入されている実際の社会や団体から直接学びを得ることが出来た。
- 4) 1年生のWWLC Basicの授業においては、昨年同様、社会課題を実際に解決する企業やNPO、などを実際に訪問、あるいはそれらの組織や関西学院大学から専門家を講師として招いたり、オンラインでお話を聞くなど、学外からの学びを多く得ることが出来た。
- 5) 11月には他の2年生のWWLC 3科目が合同で、全国のWWLC連携校に呼びかけ、生徒が主体となり、昨年から引き続いて「SDGs オンラインミーティング」を企画、運営、開催をした。生徒実行委員会を立ち上げSDGsに精通する著名な講師2名も生徒たちが交渉し、またディスカッションの進行や司会、授業報告会も自分たちで行うなど、60名ほどの生徒たちが社会課題の解決に関する学びを深めることができた。
- 6) 2020年の3月、2021年の6月、8月には、“International Online Meeting”を生徒主体で3回にわたって開催した。アジアの国々の高校生たちと英語で国際問題について議論を行った。企画、運営を自分たちが責任をもって実行し、大学生の手を借りながら見事成功させた。
- 7) 12月には1、2年生の学年全体において、SDGsについて理解を深める学年行事を開催した。1年生はカードゲームを用いてSDGsの本質を

知り、ルワンダの貧困問題に取り組まれている学生の起業家の講演会を実施した。2年生は地域研究課題と称して、学校の近くの市町村と連携し、各団体が抱える問題をグループごとに解決策を探り、プレゼンテーションを行った。どちらも活動を3学期に継続する予定である。

**(取組の効果に対する評価)**

- 「授業や行事を通じて国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる(生徒)/高める努力をしている(保護者・教員)」という項目について、生徒(問30)は74.7%(昨年比-0.3)、保護者(問21)は77.2%(昨年比+4.9)、教員(問40)は88.4%(昨年比-2.2)の肯定的な回答を得た。昨年度とほぼ変わらない水準であるが、探究授業での様々な教室外での活動の広がり、SDGsに関わる取組が学校・学年行事で少しずつ増えていることを考えると、来年度以降、生徒の中で国際的な関心がさらに高まることを期待したい。また、それらの国際的な問題に触れることのできる機会をさらに増やすことができるよう引き続き取り組んでいきたい。
- 「授業や行事活動で、語学力や国際性を身につけることができるプログラムなどが高等部で提供されている」という項目について、生徒(問31)は81.2%(昨年比+3.3)、保護者(問22)は74.3%(昨年比+3.6)、教員(問41)は約86.5%(昨年比-4.1)となっており、比較的高い水準で肯定的な回答を得た。今年度から1,2年生の英語科の授業で導入した年10回のWeblioオンライン英会話授業の効果についてはこの結果からはそれほどどうかがえないが、個別に1対1で英会話を授業中に行うことが語学力の向上に寄与することを来年度以降期待したい。国際性については、留学機会や留学生の受け入れを増やし、国際交流イベントへの参加を強く促すことで、さらに向上することが期待される。
- 「将来、機会があれば留学や渡航をしたいと感じている(生徒)/意欲を育んでいる(保護者・教員)」という項目について、生徒(問32)は69.9%(昨年比-3.0)だったものの、保護者(問23)は61.3%(昨年比+5.2)、教員(問42)は76.9%(昨年比+1.5)と、コロナ前には及ばないものの、昨年度とそう変わらない肯定的な回答を保った。海外語学研修、またその代替案としての国内英語研修がコロナのために中止になったが、実際に海外に生徒が留学をしたことや海外からの留学生を受け入れたことが留学へのポジティブな印象を与えたのかもしれない。来年度は海外留学生を3名受け入れる予定でもあり、また海外への留学に向かう予定の生徒も既に6名いる。彼らを通じて、海外に行きたいという意欲を向上させる取組を続けていきたい。
- 「授業や行事などを通して、生徒が社会的課題に対して関心を持ち、取り組もうとする姿勢を育んでいる」という項目については、生徒(問16)79.1%(昨年比+6.4)、保護者(問9)は83.5%(昨年比+6.9)と、両者共に「強く思う」が5%以上増えるなど、肯定的な回答を昨年度より多く得ることができた。学年行事でSDGsに取り組んだ成果がここで垣間見られた。WWLCや国際交流部などの学校全体的な取り組みを通じて、学校内だけでなく学校外にも生徒たちの視野をさらに広げていきたい。

**今後の方策**

- WWLCは本年度をもって終了するが、この取組は来年度以降も続けていく予定である。国際理解を含む広い意味での社会的課題やそれらの解決に対する関心、興味を高め、実際に生徒たちが関わっていけるような取組をさらに展開していきたい。個別の授業やプログラムを通してだけでなく、学年全体、学校全

体として取り組めるような行事を今年度実施したが、これを充実させていきたい。

●新型コロナウイルス感染拡大は、国際理解教育の手段に依然制限を加えることになると思われる。オンライン会議ツールを用いた代替的な国際交流プログラム、国内外の国際交流プログラムをさらに継続して積極的に提供していく必要がある。そうすることで、将来的な留学、海外渡航、国際的な諸問題への関心・意欲を高め、国際理解を積極的に図ろうとする姿勢を育てていけるのではないかと考える。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

## 総合評価

今年度も新型コロナウイルス感染症に伴う様々な制限や制約の中での教育活動であったため、担当部署や質問への回答はその影響を多少なりとも受けていることが表れており、全般的に評価の下がった項目は、感染症のために活動の制限や、縮小、中止などにより評価項目の対象となる活動などが十分に設定できなかつたことに起因すると考えられる。

ただ、今年度も生徒・保護者共に高等部の新型コロナウイルス感染拡大防止対策を受け止め、その対応への理解を示していただいていることが伺える結果でもあった。生徒と教職員が一体となって、このコロナ禍の制限・制約の中でできる限りのことを創意工夫を重ねて高等部の教育活動の歩みを止めず、進めてきたことの証でもあると考える。

生徒・保護者・教員ともに関西学院でのキリスト教主義教育の理念が今年度も概ね共有され、高等部教育において重要な位置づけにあることが理解されていると言える。全校礼拝をチャペルで持つことができず、讃美歌も歌えない状況が長く続いているが、これまで堅持してきた高等部のキリスト教主義教育がしっかりと根付いていることの証左と考える。また、この困難な状況であっても外部と関わり続けたことが、生徒問4の評価にもよく表れている。

教育課程・学習指導に関しては、コロナ禍で混乱しているところに「働き方改革」にも寄与する新教務システムを導入したが、そのシステムそのものの不具合もあり、さらに教員への混乱も生じたことが評価結果にも表れている。これは一過性のものであり、来年度より運営が安定することで解消されるであろう。また、学習指導要領改訂、文科省指定事業、WWLCの継続による探究型授業のさらなる深化のための方策などによる、教育課程そのものに関わる大きな変更による教員の戸惑いや共通理解・認識不足があるが、一方でWWLCなどを通じて教員の授業改善や学力保証や向上に対する意識が高まったことは間違いなく、それが現状への否定的な評価につながっていると考えられる。来年度は教育目標を教員全体で議論し構築することをもって、また研修の機会を増やし、教員全体での共有意識を高めるための努力を行う。

また、進路指導、関西学院大学への接続に関する情報については、今年度もその伝達機会を大きく逸したが、生徒、保護者とも情報を得られているという実感を持っているという結果が得られた。来年度はA i G R O Wの活用方法や、3年間を通じた進路指導の在り方を含めて改善を図り、より自己の進路を深く考える機会を提供していく予定である。

生徒指導面においては、今年度も特に感染症拡大防止のために多くの労力を費やすこととなり、感染対策にかかるマナーについては生徒の中でかなり定着が図られている。しかし、できるだけ個々の生徒に届く注意喚起などの指導に徹したものの、全体への場が失われたこともあり、十分な指導徹底に至らなかったことは否めず、それが生徒の質問項目、問20に結果として表れている。さらに同様に教員の中での評価にもつながっていると考える。また、登下校時のマナーを含め、集

団での移動時における生徒の意識向上には課題が残っている。その都度指導を入れているが、大きな効果はなく今後の改善事項となる。

教育環境に関する質問に対してはここ数年変わらず生徒・保護者・教員の多くが整備されていると回答し、満足感を得ている。ただ、男女共学化が完全に定着した現在、女子生徒のみならず男子生徒の中にも男女共学化、定員増に対する施設・設備に対する不便さを感じており、コロナ禍の影響での施設・設備利用の制限もあるが、その実態把握に努める必要がある。

I C T環境については教員が教育活動におけるI C T機器活用・運用能力が向上したことにより、更なる高い環境を求めたいことから、現在の環境に対しての評価がなされていると思われる。WWLCが今年度をもって終了となるが、学習指導要領の改訂も伴ってI C T環境の整備とともに、ソフト面を含めてさらにアクティブラーナーを育成する授業研究を深め、P B L型、探究型授業実践のための環境の改善と実践能力の向上を目指す。

人権教育はその理解を深めるためのプログラムやグループワーク、学年全体が集まってできる活動に大きな制限が生じたために、当初の計画されたことが実行できなかったことがアンケート結果に反映されたと考えている。しかし、人権教育を体系立てて推進するためのシラバスの整備や多様性を受容するための、「生」の声を聞くことができるプログラムの提供などの進展はあった。また、コロナ禍だからこそ見えてきた問題提起をしてきたこともあり、生徒自身がより人権に関わる問題に関心が高まっていることは認められる。「いじめ」にかかわる事柄にも生徒部も含めて学校として積極的に対応していることが生徒・保護者にも理解を得ていることもアンケートから読み取れる。この結果を受け、インクルーシブでダイバーシティがあるコミュニティ作りをさらに促進する計画である。

今年度も海外に行く、あるいはこちらに招くという、すべての国際交流プログラムは中止を余儀なくされたが、昨年度実施したオンラインでの授業や国際交流などのプログラムを今年度も実施し、WWLCの要件でもある国際会議もオンラインで実現することができた。国際理解教育に関わる全ての質問項目でこのような状況の中でありながらおおむね評価が高かったことは、WWLCを通して、またSDG sに関する1、2年生が関わるプログラムの実施を通じて、興味関心が高まる機会の提供ができたことによるものと考えられる。だからこそコロナ禍終息後に、一気に活動を元に戻していくことが求められるとも解される。

この事業を通しての教育活動をしてこに進めていた、高等部としてのすべての教育目標策定作業が、昨年度はこのコロナ禍で止まってしまったが、今年度後半になり再開し全教員が集い議論する場を持つことができた。まだ制約も多いが来年度も引き続き議論を推し進めながら、この事業のテーマでもある「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」をもって、関西学院が目指すところのグローバルリーダーである「“Mastery for Service” を体現する世界市民」の育成に、しっかりとつなげていきたい。

## 2021年度の評価をふまえて2022年度に予定している評価項目、テーマ等

2022年度は、評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、WWLC後に引き続き継承していく教育改革を教員に問う評価項目の設定や「カウンセリング委員会」が独立することもあり、「カウンセリング」の視点での評価項目設定も検討をしたい。男女共学を意識した評価項目を設定していたが、共学化が定着したことから、インクルーシブでダイバーシティなコミュニティの実現に向けての評価項目の見直しを今年度着手できなかったため来年度の検討課題とする。

## 第三者評価/学校関係者評価

昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響によって様々な制限や制約がある状況下において、高等部が一丸となって工夫を凝らした取組をしていることは、非常に高く評価できます。

また、生徒や保護者を対象としたアンケート調査の結果からは、このような取組が好意的に受け止められており、高い教育効果をあげていることが確認できます。以上は総評ですが、次に各評価項目についてコメントしたいと思います。

キリスト教主義教育の実践については、生徒を対象としたアンケートの結果から、高等部の建学の精神が生徒に十分に理解されている様子がうかがえます。それは、礼拝や早朝祈祷会に加え、社会貢献活動をしていることの成果であると思われ、高く評価できます。

教育課程・学習指導については、まず基礎学力に課題のある生徒を対象とした授業を行っていることは、生徒が大学での授業についていけないという事態を防ぐという点からも評価できます。次に、WWLCに代表される探求型の学びについては、授業風景を一部見学しましたが、生徒が活発に議論している様子がとても印象的でした。また、高等部における探求型の学びは、全国的に見ても先進的な取組であるため、手探りで進めていかざるを得ないところがあるかと思えます。そのため、課題を整理した上で教員間で共有し、それらを乗り越えるための方法を検討することが期待されます。また、探求型の学びは基礎学力の上に成り立つものと考えられるので、基礎学力向上に向けた取組と探求型の学びとの連続性を検討することが必要かもしれません。

生徒指導については、生徒同士の密を避けるため全体への指導が困難ななか、登下校中のマナー向上や黙食の定着が見られることは、教育の成果であると考えられます。

教育環境整備については、アンケート調査の結果を見ると、生徒、保護者、教員いずれも肯定的な評価が大多数を占めることから、大変優れていると言えます。今後も、このような高い水準を維持し、教員のICT活用能力の維持・向上に努めることが期待されます。

人権教育については、三年間の人権教育シラバスを作成し、各教科教育で様々な人権問題を扱ったことは、生徒の人権意識・人権感覚の向上、という点からも非常に高く評価できます。今後は、個別具体的な人権問題を教材として取り上げることに加え、それぞれの人権問題に共通する事柄について生徒に考えさせたり、人権問題を複眼的な視点で捉える力を育成したりすることが期待されます。

国際理解教育については、新型コロナウイルス感染症の拡大により海外への研修旅行や留学等が困難な状況のなか、ICTなどの限りある資源を積極的に活用し、生徒の国際的な問題や世界の出来事などの興味・関心を引き出している点は、大いに評価できます。今後、新型コロナウイルス感染症が終息し、海外に行くことが可能となったとしても、今年度行った取組を無理のない範囲内で継続することにより、一層高い教育効果が期待されると思います。

学校評価アンケートには高等部の教育活動の中で重要な意味を持つ項目が的確に網羅されています。結果を全体として見ると、肯定的・好意的な回答が常に高率を占めていると同時に昨年度の結果と大きく変動をしていないことが明確になっています。このことは学校の運営が安定していること、学校の理念、使命、価値観、長所などが学校共同体を構成するみなさんの間に共通認識されていることのあらわれでしょう。さらにアンケートの回収率が高いことにも生徒、保護者、教員の学校への帰属意識の高さや親近感の強さがうかがわれます。

<学校訪問から>

11月24日に高等部に訪問しました。伝統を感じる校舎の内外は質素な雰囲気の中に清々しさと落ち着き、あたたかさがあふれ、この学校がキリスト教に基づく教育を実践していることが直感的に伝わってきます。生徒達はみな制服を正しく誇りを持って着用していました。すれ違うたびに、目を合わせてかわされる挨拶の習慣は短期間で身につくものではなく、明らかに高等部の着実な教育活動を通して一人ひとりの生徒に浸透していることがわかります。参観した教室では、生徒達が教科の特性によって活動的に、あるいは落ち着いて学習に向かっていました。教員の指導からは自信とあたたかさが伝わり、教室内にポジティブな雰囲気を感じました。

<総合的な観点から>

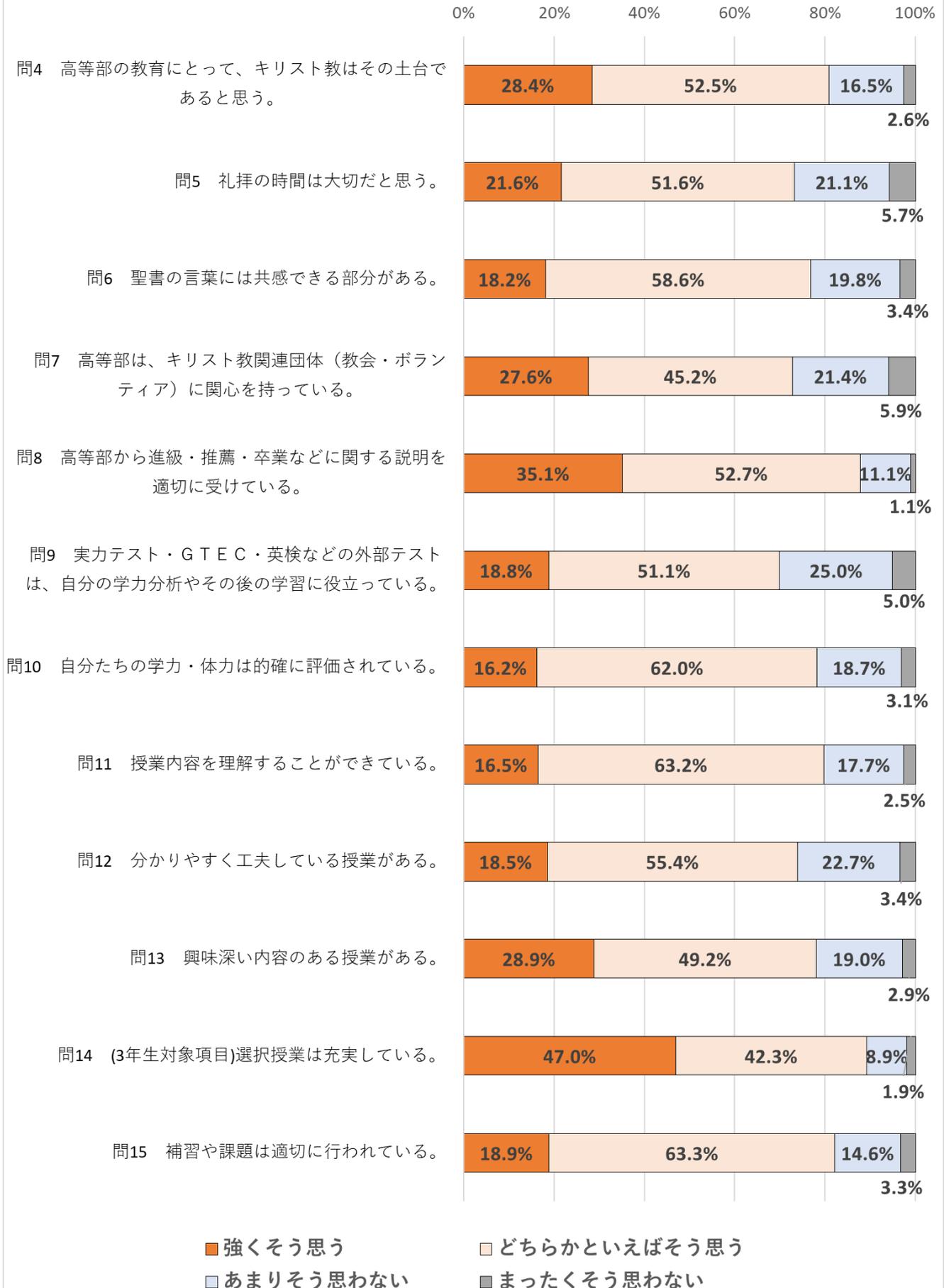
在校生数が千名を超える大きな学校の運営・管理、生徒への教科指導・教科外指導、行事、保護者への対応など、扱われる業務の量と責任の重さは計り知れません。それでもなお高等部の生徒、

教員が今年度も大きな成果を達成していることに感銘するばかりです。来年度への課題を具体的に把握していることから、さらなる発展が期待されます。

2021 年度学校評価

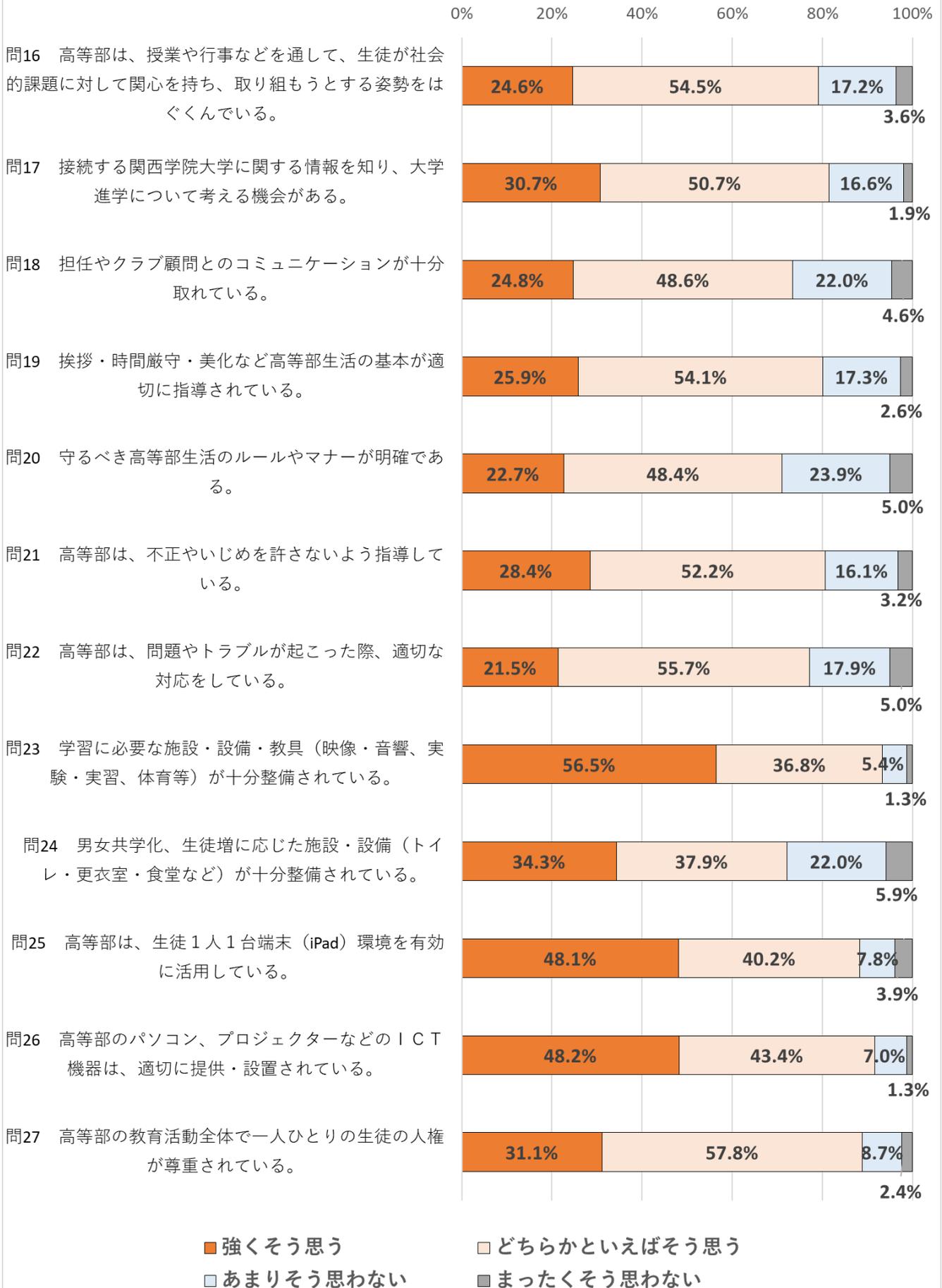
## 2021年度 学校評価アンケート集計結果

高等部・生徒 (回収率 99.6% 1,140人/1,145人中 ※有効回答数1,139人)



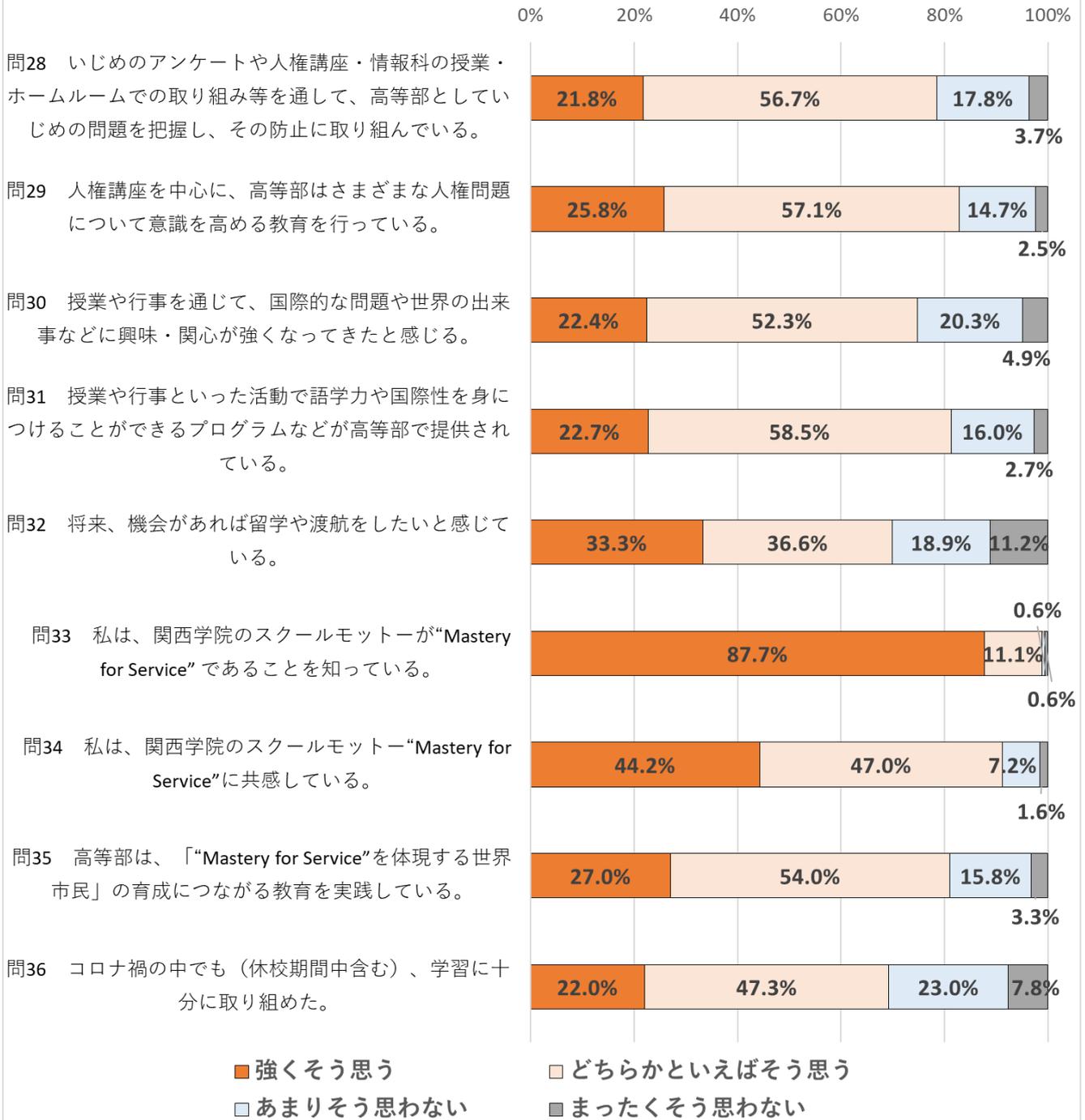
## 2021年度 学校評価アンケート集計結果

高等部・生徒 (回収率 99.6% 1,140人/1,145人中 ※有効回答数1,139人)

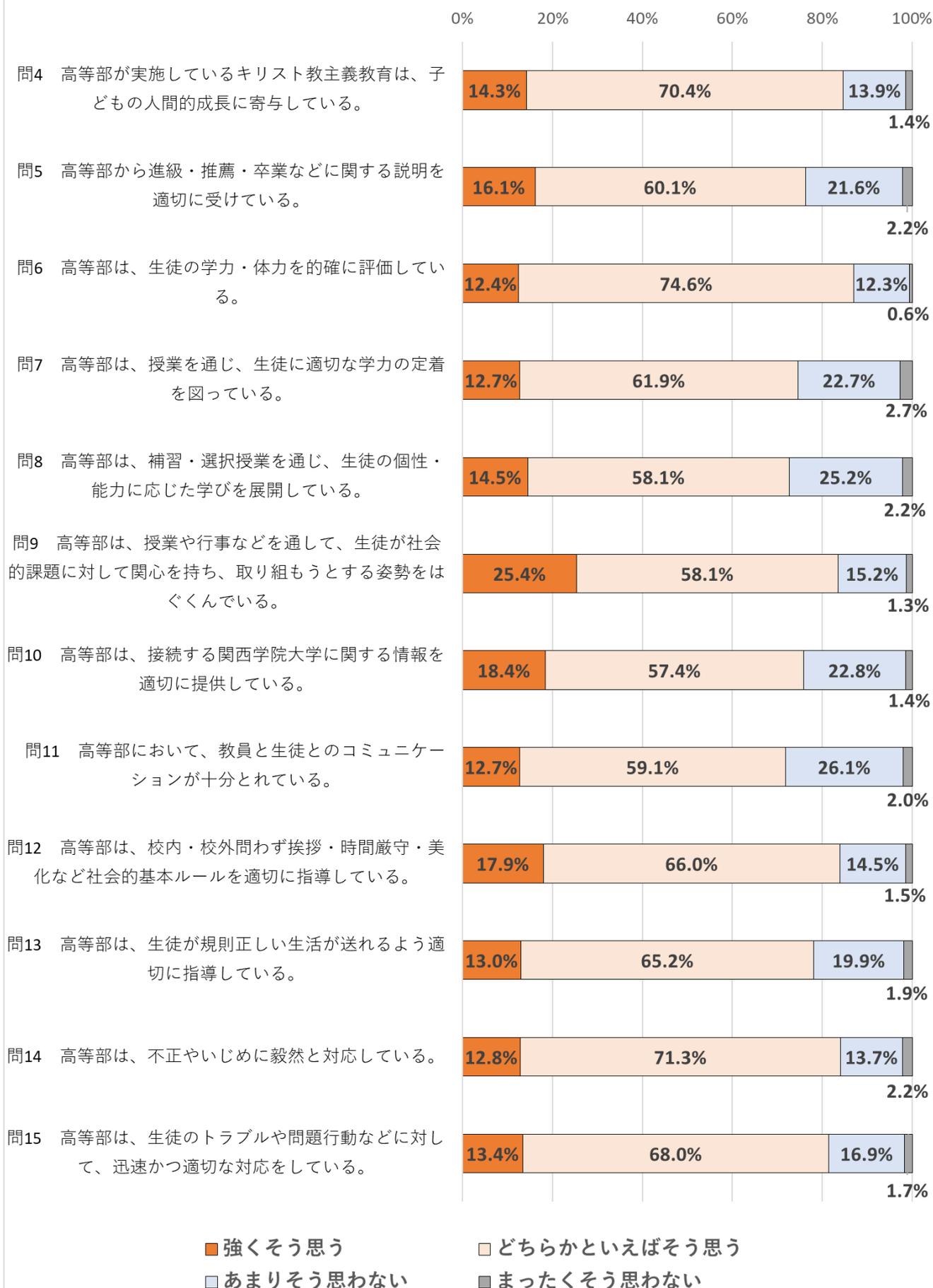


## 2021年度 学校評価アンケート集計結果

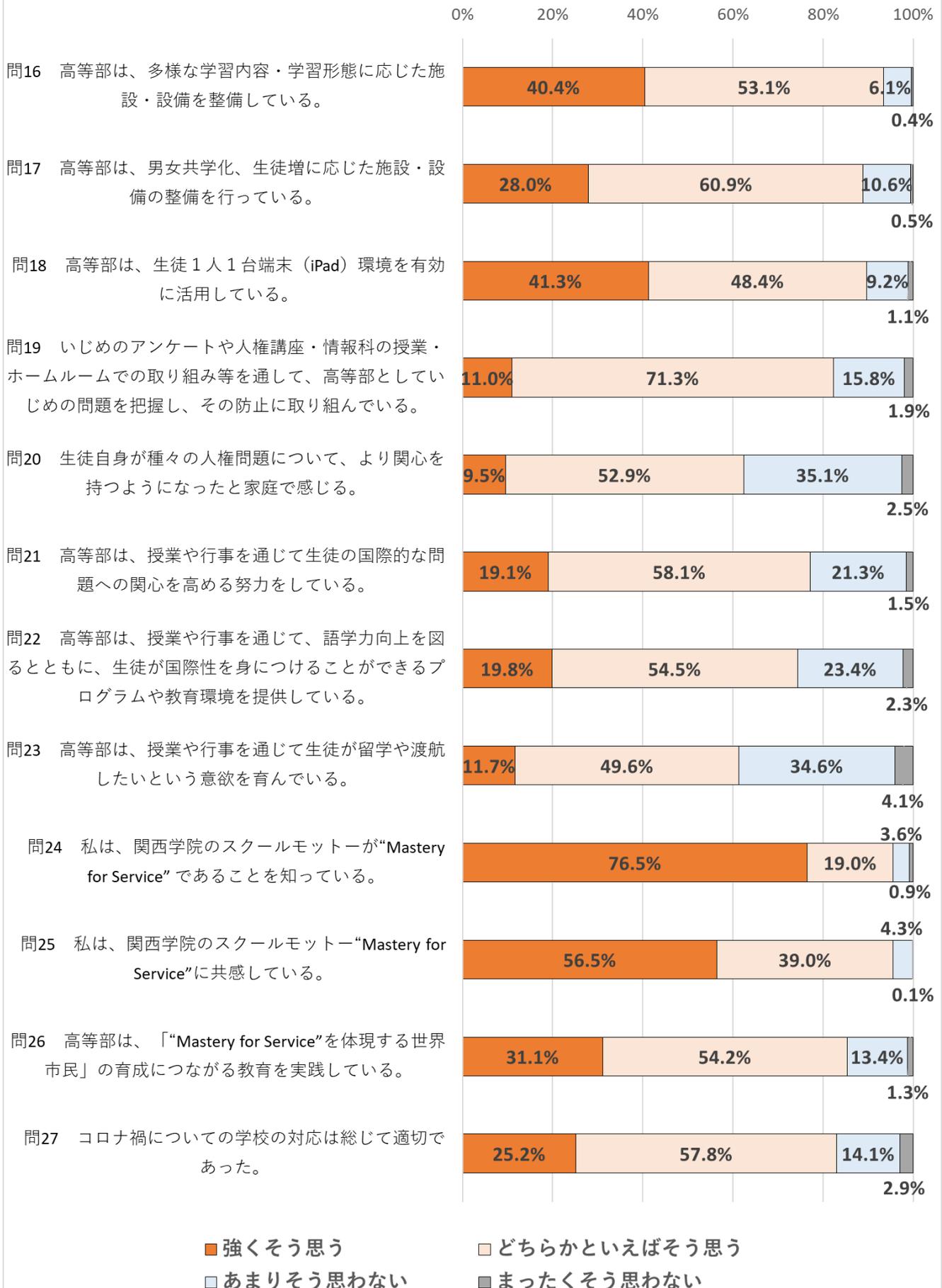
高等部・生徒 (回収率 99.6% 1,140人/1,145人中 ※有効回答数1,139人)



**2021年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・保護者 (回収率 68.9% 788人/1,144人中)**

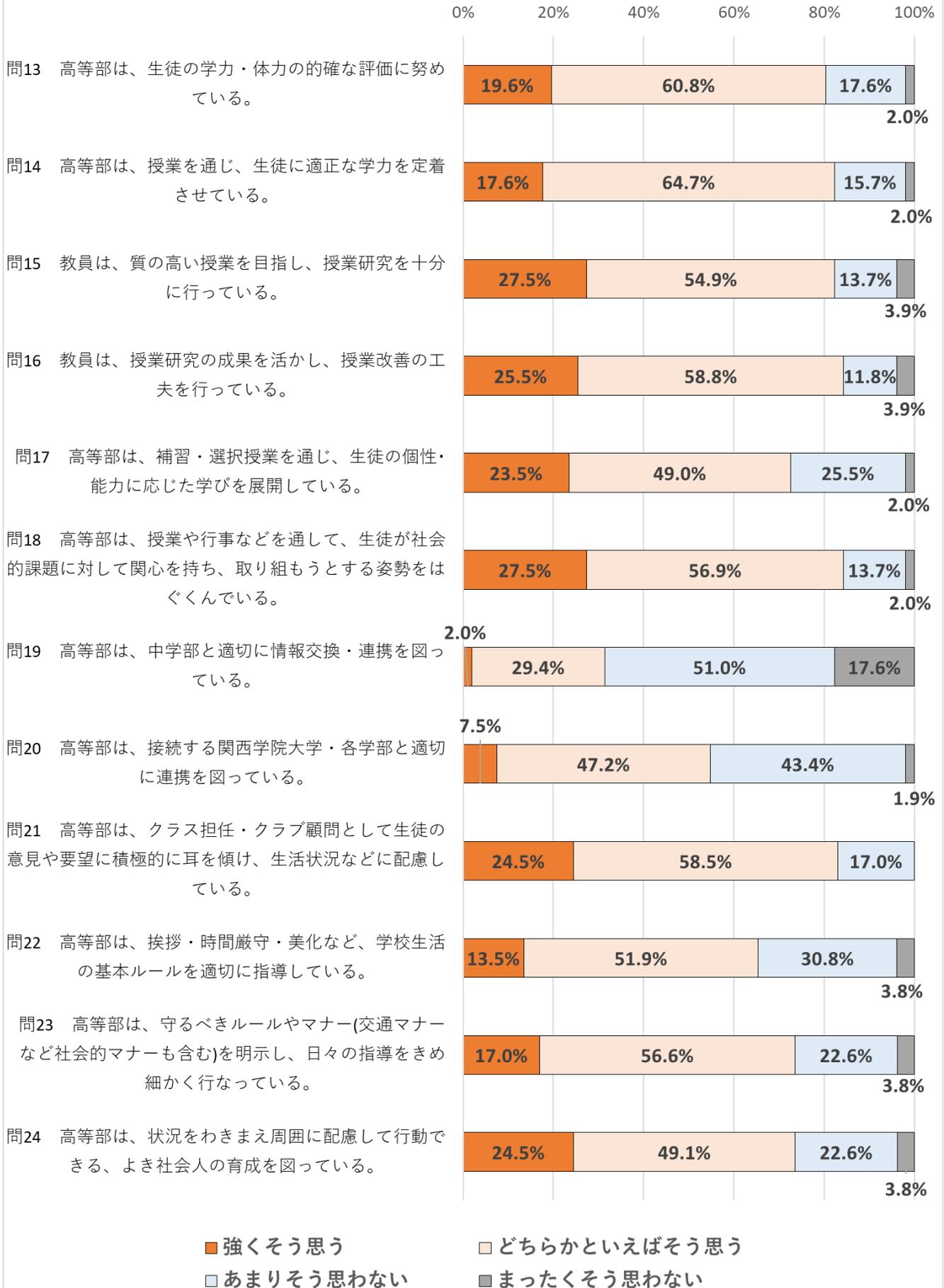


**2021年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・保護者（回収率 68.9% 788人/1,144人中）**





**2021年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員 (回収率 100% 53人/53人中)**





**2021年度 学校評価アンケート集計結果**  
**高等部・教員 (回収率 100% 53人/53人中)**

